



カテーテル治療、バイパス手術。そして薬物療法が冠動脈疾患の三大治療法ですが、どの方法が一番なのか？この30年間でさまざまな研究が行われてきました。冠動脈疾患の重症度に応じて治療法の有効性が検討され、米国とヨーロッパの心臓病学会で一定の結論が出されました。

それによると、大きな冠動脈の付け根の狭窄や2本以上の冠動脈に狭窄がある場合（冠動脈は3本あります）には薬だけでなく、カテーテル治療かバイパス手術のどちらかを行った方が良いのですが、逆にその他の狭窄では無理に治療をしなくても、薬をしっかりと飲んでいけば良いことが分かりました。

ではどうしても治療を受けなければならなくなった場合には、カテーテル治療とバイパス手術のどちらが良いのでしょうか？ 大きな冠動脈の付け根の狭窄は命に関わりま

冠動脈疾患



循環器内科医

上野勝己氏

見れば絶対にバイパス手術がいいと考えられていました。ところが薬物溶出ステントの改良が進み、長期の安全性が証明されたことで、患者の条件が合えばバイパス手術をしなくても、カテーテル治療で

カテーテル治療進歩



パス手術をするしかありませんでした。

この石灰化病変を打ち破る救世主が、ロータブレードという治療用カテーテルです。ロータブレードは20、30ミリのダイヤモンドが約2000個ちりばめられた冠動脈用「やすり」です。高速で回転しながら石灰化病変を削ります。削り出された小片はほとんどが赤血球より小さく、冠動脈の先に流れて肝・肺・脾臓で吸収されます。脳には

十分であることが明らかになりました。

薬物療法とカテーテル治療の進歩と、きちんとした長期的な調査がいくつも行われたおかげで、これまではバイパス手術を受けなければならなかった患者も条件が合えばカテーテル治療が選べるようになり、カテーテル治療が必要と考えられていた患者も薬の治療だけで十分なケースも多いことが分かってきました。これは患者の立場からは大きな朗報です。

働き盛りの人には2、3日の入院で済むカテーテル治療のメリットは大きく、高齢者

には手術よりも体への負担の少ないカテーテル治療の有用性は明らかです。

しかし、カテーテル治療の障害となるのが石灰化病変です。カテーテル治療は冠動脈をバルーンカテーテルという一種の細長い風船で押し広げ、ステントを内側から入れて縮まないようにするわけですが、カルシウムが沈着して骨や歯のように硬くなった石灰化病変では、バルーンでどんなに圧をかけても広がらないのです。広がっても血管が破裂したり、大きな傷がついたりします。カテーテル治療ができなければ、バイ

飛びません。

ロータブレードを使えばかなりの重症例でもカテーテル治療が可能で、多くの患者がバイパス手術を免れることができます。とりわけ手術の危険性のある高齢者にとって有効です。一方、先に述べた場所以外の冠動脈に狭窄があつて症状の軽い患者は、十分な薬物療法を続けて行けば、狭窄があることを怖がる必要がないのです。冠動脈疾患の治療は今後、さらに患者にやさしいものとなっていくでしょう。（松波総合病院心臓疾患センター長、羽島郡笠松町田代）

「やすり」で石灰化病変削る